

児童の言葉、その『時』を振り返る

— ひとりだけの卒業式 —

大阪精神医療センター分教室

1 はじめに

20XX年11月から14か月在籍し、本分教室を卒業した児童の指導や関わりについて振り返りたい。この児童の転入当初の様子は次のとおりである。

- ・言語表出が少なく、言語理解度も低かった。
- ・伝わらない、分からないとすぐに怒り、暴力や態度で感情を表出していた。
- ・問題行動を振り返るにあたって、言語での振り返りは難しかった。
- ・基礎学力である「読み・書き・計算」の習得に支援を要した。
- ・優しく、友だちに好かれていた。

児童が卒業するまでの学校生活において、様々な課題が表出し、その都度、担任をはじめ分教室の教員で連携し対応してきた。その中で、児童の変化や成長を信じ、その姿を目の当たりにしてきた。今回は、授業に関わる児童と教員の言葉に着目し、児童の変化を詳細に記したい。また、本児が参加した「一人だけの卒業式」の準備から当日の様子を記録として示し、本分教室だからこそできた卒業式を紹介したい。

今回の実践報告では、次の3つのその『時』を紹介していく。

- ・「俺も同じように勉強がしたい」と言えた時
～児童の実態と学習意欲に合わせた指導・教材の工夫～
- ・「違う！なんで忘れてんねん！」と言えた時
～児童と教員の信頼関係の構築～
- ・「先生たち、なんかいいと思う」言えた時
～ひとりだけの卒業式～

2 「俺も同じように勉強がしたい」と言えた時

～児童の実態と学習意欲に合わせた指導・教材の工夫～

(1)算数の授業における小学6年1学期の様子

授業の取り組み

進級し、担任も授業形態も変化した。主要教科（国語・算数）では、理解度に合わせてグループ分けを行った。学年相応の内容ではなく、能力に合わせた教材を使用した。指導教員は担任ではない教員が順番に担当し、教材は担任が用意した。

配慮・工夫

- ▶一斉指導では、理解度の差が大きく、本児のプライドも傷つくのではないかと想定し、本児に必要な学習指導を行うためにグループ分けを行った。
- ▶変化に弱いので、見通しが持てるようにグループメンバーや指導教員、学習内容・順序・時間について事前に知らせるようにした。

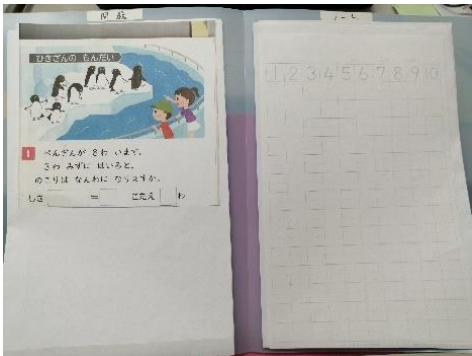
上記の取り組みの結果、本児は、新しいグルーピング、授業の流れ・内容に戸惑いを見せつつも、真面目に取り組む姿を見せた。一方で慣れてくると、自分のペースでわがままを通そうとすることも増えてきた。また、見通しが持てないと、取り組むことが難しいこともあった。

ある時、担任が指導していたグループが教科書とノートを使って学習している様子を見て、「俺も同じようにしたい。」とつぶやいた。このつぶやきが新たな方法を検討するきっかけとなり、2学期への取り組みに繋がった。

I 実践報告

(2)算数の授業における小学6年2・3学期の様子

2学期より在籍児童の入れ替わりもあり、担任が本児の授業を担当することとなった。そして、本児の「教科書を使って勉強がしたい」の気持ちに沿った支援指導を、次の通り行った。

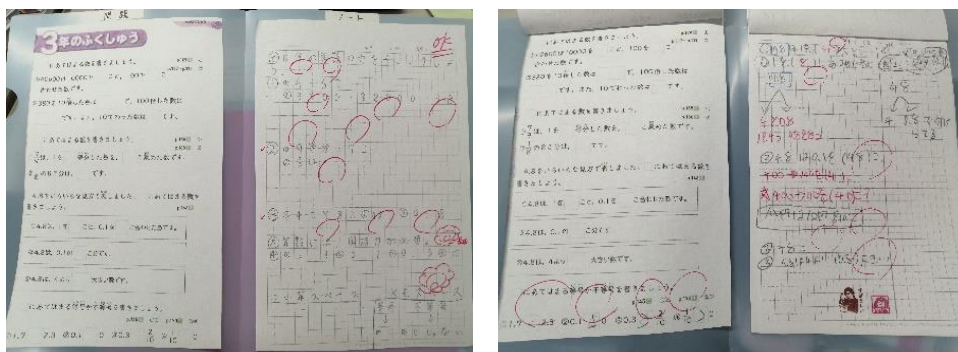
授業の取り組み・配慮・工夫	児童の様子・反応
<p>① 自分だけのオリジナルノートの作成</p> <p>▶1 学期の様子を踏まえ、能力に合った学年の教科書の問題を、カラーコピーし、見開きでファイルに貼り付ける方法を試す。(左は問題、右は方眼紙ノートのコピー)</p>  <p>▶オリジナルノートを使い、教員はホワイトボードに板書し、児童はそれをノートに写すという一般的な授業の形を行うことにした。実際の教科書では1ページの情報量が多く、意欲の低下につながるので、少し大きめにコピーしたものを問題ごとに切り取り、貼り付ける形にした。また、問題がカラーコピーであることで見やすくなり、何より教科書らしくなった。ノートは本児が書きやすいように実際の方眼紙ノートを少し拡大コピーしたものを使用した。</p>	<p>▶2 学期最初の授業で、左記の方法を説明すると、とてもうれしそうに目を輝かせ、意欲的にコピーしたプリントを切り貼りし、ノートを作った。</p> <p>▶「はい、できたで！やろやろ！」と、とても積極的に取り組んだ。</p>
<p>② 書き方を自分で選んで決めることができるノート</p> <p>▶最初は自分でできるかけ算九九や簡単なたし算ひき算などの問題を用意し、新しい学習スタイルに慣れることを目標とした。</p> <p>▶書くことに苦手意識があり避ける傾向があったので、右側にノートはあるが、左側の問題ページの下にスペースを設けておき、好きな方を選んで書き込めるという選択式にした。『自分で選んで決めることができる』ということは、本児を尊重するという観点からとても大事なことであった。本児がノートに書くことは難しいだろうと予想はしていたが、ファイルに教科書とセットでノートを用意するということは、本児の「みんなと同じように勉強したい。」という気持ちを満たすために必要であった。</p>	<p>▶自分でできることがうれしそうで、「はい、できたー！」と満足気であった。</p> <p>▶書く場所が不明瞭であったり量が多かったり、パッと見て難しいと感じたりすると、途端にイライラした様子を見せることもあった。</p> <p>▶最初は、頑張ってノートに書こうとトライしていたが、問題の下のスペースに書き込むことが増えてきた。徐々に、教科書のコピーだけを貼り付けるようになった。自分で決めたことなので、怒らずにできた。</p>

<p>③ 読む活動を取り入れる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶計算問題と合わせて、文章問題や図表も取り入れるようにした。 ▶教員はリアルタイムで板書することにしておき、児童が問題を読み上げることで教員が板書するお手伝いをするという設定にした。 ▶コピーした問題にはあらかじめルビを振っておき、児童が意欲的に取り組めるようにしておいた。 ▶国語や様々な場面で、読むことが苦手であるが故に消極的になっている場面が見られたので、算数の学習の流れの中に『読む』活動を毎時間取り入れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶取り組むことに抵抗はなかった。 ▶張り切って問題を読み上げていた。 ▶ルビを振るのを忘れていると、「これ何て読むん？」と怒らず聞くことができるようになってきた。 ▶様々な場面で、言葉を発する場面が見られるようになっていった。
<p>④ 集中力が保てる時間に合わせる</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶集中が持続する時間は短いので、毎時間2問程度としたが、様子を見て増減させた。 ▶つい、頑張らせようとしがちになるが、そこは冷静になって切り上げるタイミングを判断した。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶どんな時も必ず1問は取り組み、調子が良い時は数多く取り組むことができたこともあった。
<p>⑤ オリジナル算数双六を作ろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶オリジナルノートでの学習後には、児童の希望を聞き、オリジナル算数双六を作ることとした。 ▶あらかじめこちらで案を考えておいた上で、児童の意見は聞き、取り入れられることは取り入れ、無理なことは理由を添えて伝えた。 ▶文章問題を解いて、双六を楽しむという流れが固定化した。 ▶授業のルーティン化と自分の話を聞いてもらえるという実感が安心とやる気につながっていると感じる。 ▶オリジナル双六をするにあたって、算数的な双六であることと、ルールを守って行うということは徹底した。 ▶教員の譲らない部分を守ることは大事である。信頼関係が構築された上でなら、こちらが主導権を握っても安心感は保たれた。変更や提案もできるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶教員も試行錯誤しながら児童と接していく中で、本児から自分の意見を言葉で伝えてくることが増えた。 ▶算数の授業を楽しみにする言葉が聞かれるようになる。 ▶条件やルールを提示しても怒らずに受け入れられるようになっていった。 ▶この頃には、いつもと違うことを取り入れても怒ることなく、受け入れていた。
<p>⑥ オリジナル文章題に取り組もう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶文章問題にすることにこだわった。教科書や問題集の問題だけではなく、身の回りの出来事を文章問題にすることで、興味をもって取り組むことができるようにした。 ▶教員がオリジナル文章問題を作って出題していく中で、児童が作る機会も設けた。児童が興味のある内容を問題にすることで、意欲を持続できるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶読むことと合わせて読解も難しいので、理解できないと「え？どういうこと？」と聞いてくるが多かった。 ▶毎時間コピーした問題が配付されると、「今日はどんな問題だろう？」という様子で、興味をもって読んでい

I 実践報告

▶身の周りの出来事を問題にすることで、語彙力が増えることをねらいとした。

た。
▶算数の授業以外でも、言葉によるコミュニケーションが増えていった。



上記の配慮・工夫に加え、ノート工夫として、字の大きさ、色、ルビ振り、選択できる余地などがある。また、授業中の教員の声の大きさ、目線、言葉の選択、方法の切り替え、授業の主導は教員であるということの自覚（すべてOKとすると、その場は丸く収まるかもしれないが、それでは責任を子どもに押し付けることになる）、予想を超える子どもの発想を受け入れる柔軟さ・素直さ、言語化を促すために教員も分かりやすく端的に明瞭に話すこと、等が挙げられる。

(3)まとめ

一番難しいが大切なのは、やり取りしながらその時々に合わせて負荷を加減することで意欲の低下を防ぎ、達成感を味わわせることであるとを感じる。ここでは、授業というライブにおいて、いかに児童を理解できているか、その場の気持ちを読み取れるか、瞬時に判断し更には判断に合った対応を持ち合わせているか、テンポは良いか、間合いは適切か、など教員の経験や技量が必要になってくる。

もちろん、やる気ゼロの日もあれば、教員とコミュニケーションがうまくいかずに衝突することもあった。そんな中でも、教員も一人の人間として間違いを認め謝る、怒る、喜ぶ、疲れているなど、様々な面を見せ、関わることで、児童は徐々に心情を態度だけではなく獲得した言語で伝え、会話ができるようになっていった。言葉だけがコミュニケーションのツールではないが、方法の一つとして言語を獲得し、自己肯定感を高められたことは大きな収穫と言える。

本児の弦きを拾い、実現する中で、実態に応じた配慮は多く必要であったが、『オリジナルノート』というツールを通して、様々な課題に取り組むことができた。その課題は、切り貼りなどの作業、視写、音読、文章読解、身近な生活の言語化、コミュニケーション、ルールを守る、主体性などである。配慮と課題設定はもちろん欠かせないが、やはり全ては『信頼関係の構築』に尽きる。信頼関係がなければ、授業も成り立たない。そもそも、教室の中に入って着席しないだろう。児童が何を望み、何に困っているのか理解しようとする姿勢は、きっと児童に伝わると感じている。信頼関係の上に主体的な授業が成り立つと教えられた体験であった。

3 「違う！なんで忘れてんねん！」が言えた時 ～児童と教員の信頼関係の構築～

小学6年の10月のことである。家庭科の授業を始めようとしたところ、本児が怒り出したのである。算数の授業を通して信頼関係が築けた、そして本児が自分の思いを言語化できるようになってきた、と思っていたにもかかわらず…。本児はこの日の活動の内容を

I 実践報告

とても楽しみに心待ちにしていたが、教員がそれを忘れてしまっているということに、驚きとともに怒りを隠せないでいる。この後どうなったのかは次の通りである。

担当教員の動き・様子	児童の様子	その場にいた他教員の対応
▶担任は、授業に備えミシンで小物を縫う準備をしていた。	▶教員が準備する姿を見るや否や怒り出し、「ちがう！」と言いつける。	▶他の教員も駆けつけ、しばらく見守る。
▶担任は、児童が言語化せずに怒っている点に執着し、何に怒っているか全く分からない。	▶一向に怒りは収まらないが、理由も言わない。 ▶怒ってはいるものの、暴力をすることもなく帰りたいと言うこともなく、その場に居座る。	▶他の男性教員が話を聞こうとマンツーマンで誘い出すが、聞き出せない。 ▶授業に参加しないということで、本来なら帰院という場面であったが、本児の様子がいつもと違うことを感じ、強制的に帰らせることはせずに、見守る。
▶担任は困り果てている。 ▶何のことを言っているのか、まだ見当がつかないでいる。	▶「なんで、忘れてんねん！」「なんで、思い出さへんねん！！」と言いつ出す。 ▶担当教員の様子を伺いながら、廊下や教室をうろうろしている。	▶どうにか何か言ってくれないかと声をかけ見守り続ける。
▶担任が思い出し叫ぶ。「あーあー!!ごめーん!!野菜切るんやった!思い出した。すっかり忘れてた!!」 ▶慌ててまな板と包丁を準備しに走り、本児に「一緒に野菜取りに行つて洗つてくれる?」と声をかける。(繰り返して謝りながら。)	▶顔を上げる。「やっと思い出したな。」(ホッとしたような、あきれたような和らいだ表情で。) ▶素直に応じ、張り切って野菜を洗い、野菜を切る授業に参加した。	▶他教員も、予想外の展開に笑顔が戻る。

以前の本児であれば、怒つて暴れるか、病棟に帰るかの二択であることは想像に難くないが、授業と一緒に取り組む中で育んだ教員との信頼関係が、教員が思い出すことを信じ、思い出すまで待つという選択を可能にしたと考える。しかし、これは担当教員以外の他の教員の、「帰さずに様子を見守る」という判断がなければ、待つことは不可能であった。何かあると信じ、帰院させずに見守るという判断に担任は救われたし、何より本人もうれしかったはずである。この判断を可能にしたのは、教員間で日頃から細やかに児童情報を共有していたことである。もちろん、この出来事があつた日の放課後も、本児の話題で温かく盛り上がり、共有することができている。

その後、本児が思い出した教員を許し、とてもうれしそうに野菜を収穫し洗い、切っていた姿を忘れることができない。大人は信じられないと言つていた本児の、大人を信じて待つ、そして許すという体験を目の当たりにし、反省とともに温かい気持ちになり、人の

I 実践報告

成長について深く考えさせられた。

4 「先生たち、なんかいいと思う」が言えた時 ～ひとりだけの卒業式～

令和X年度の分教室での卒業式に参加するのが、本児童だけとなり、「ひとりだけの卒業式」となった。不安を感じやすい児童にとって、どのような配慮をすべきか教員間で話し合い、また、児童とも話し合い練習を進めていった。

(1)卒業式‘準備編’

1月下旬に分教室で卒業式に参加することを伝え練習の話をすると、笑顔で「めんどくさい」と言った。獲得語彙が少ないので、後ろ向きの言葉と判断せず、本児の表情と合わせて気持ちを理解するようにした。2月に入り、卒業式当日に答辞を読むことを伝え、説明を真剣に聞き「先生、書いて」と言った。以前であれば、できないことに目を背け暴言暴力となっていたが、今回は“できない”と自信がない自分を認め、「書いて」と言語化することができた。答辞の原稿の作成のために、教員とこれまでの分教室での思い出をたくさん話し合った。話しながら教員がメモし、それを一緒に見ながら出来事や気持ちを整理することで、「書く」ことに親しんだり一緒にやっていると感じたりできるように意識した。2月中旬に原稿は完成した。「また思い出したら付け加える！」とやる気満々であった。

算数の授業の中で、卒業式までの日数を題材にした文章題に取り組んだ。目標を達成するために時間と回数が必要な児童であるので、様々な機会を捉え卒業式に安心して参加できるように配慮した。

本児はiPadに興味があり、運動会のダンス練習でも教員が踊る動画を好んで観ていた。そこで、卒業式についても不安を軽減できるように、教員による卒業式の流れ動画を作成した。実際に見せると食い入るように笑顔で繰り返し観ていた。卒業式の準備や練習時間を週の中で固定していたため、本児はその時間を楽しみに感じる様子が見られるようになった。

2月中旬、分教室の卒業式に参加するのは本児だけであることを決定事項として伝えた。驚いた顔をしていたが、嫌がることなく、話を最後まで落ち着いて聞いていた。教室で式の流れに沿った練習を開始した。卒業式まで1ヶ月を切り、リアルなものになってきたので、意欲を継続させ不安を払拭できることを目標に、まずは教室の中で動きを覚えさせることとした。本児は教員の話をよく聞き、指示通りに動き、大きな声で返事していた。教員が式の流れのマニュアル用紙を持っているのを見て、自分用のものが欲しいという意欲的な言葉が出た。6時間目に練習時間を固定しようかと検討していた頃、本児が「一人きりの授業を楽しみにしていた。」と言うようになり、「6時間目は担任と卒業式の準備をする」と伝えてきた。本児と練習を重ねる中で、内容は卒業式の練習であるが、いつしか担当教員との時間と空間を楽しみにするようになっていたことを感じた。これを踏まえ、本児には、言語化できたことを誉めた上で、提案がいつも通るわけではないことも伝え、6時間目の時間割を変更することとした。

この準備の時間を使い、胸花作りと卒業に向けた荷物整理を始めた。荷物整理は計画になかったが、本児から「荷物、整理したい。」と要望があり、活動に取り入れた。卒業式参加や退院を、前向きに受け入れることができたことの表れであると捉えた。処分する物と残す物とを自分の判断で選別していた。整理しながら教員と分教室での思い出話をしたり歌を歌ったりし、楽しそうであった。



I 実践報告

(2) 卒業式‘練習編’

2月下旬、卒業式本番の会場である病棟体育館で担任と二人で練習を開始した。練習の予定がない日があると、「毎日やるって言ったのに。今日だけないとか中途半端や。」と怒ったように伝えてきた。予定が違ったことに対する不満と、楽しみにしていた練習がないと分かって残念な気持ちの表出であると捉えた。言語で伝えることができるようになった。

3月に入り、担任以外の教員1名も含めた3人での予行練習の練習を始めた。すると、分教室から体育館へ移動する時から緊張しており、移動に時間がかかった。初めてのことで、大きな不安を感じるであろうことは予想していたが、改めて、見通しと反復練習、視覚支援も含めた具体的な予告が必要であることを確認できた。計画的に取り組んできた式での動きに関しては、自信をもって取り組んでいると感じた。予行練習に対する不安を受け止めつつ、やろうとしていることに焦点を当て、寄り添うことを心掛けた。参加したくないのではなく、葛藤していると捉え、急かすことはせず、寄り添い、見守り、待つようにした。

予行練習当日の午前、本児は不安から感情の起伏も大きく落ち着かない様子であった。教員によるデモ動画は好んで観ていた。午後から予行練習を始める予定だったが、登校してこないで病棟に迎えに行くと、自分の病室から出ることもできないくらい緊張して、自分の病室の椅子に座り込んでいた。教員が迎えに行ったことで本児の表情に安心感が伺えた。体育館への移動はハードルが高く、時間はかかっても待つことが大事であると判断した。これまでに、本児が「考えてんねん、待て。」「いつも急かされる。」などの発言があったので、待つという判断に迷いはなかった。予行に参加することは目標ではなく、本番をどう迎えるか、そのための取り組みであった。教員を見てイメージを持ち、安心させるという意味でも教員代行という判断は大切だと考え、予行練習当日の本児の様子から、無理強いすることはせず、教員が代行で実施すると提案した。すると、教員が作成した動画を何度も観るなどして、教員と一緒に体育館の入り口まで移動することができた。体育館入り口の踊り場で立ち止まり、すぐには体育館の中へ入ることはできなかったが、複数の教員が様子を見守る中、時々中を覗いたり、iPadを持って撮影する教員と一緒に中に入り、自分で撮影し始めたりと、本児なりの参加をすることができた。翌日、予行練習のことを振り返ると、「めんどくさい。」と言っていた。教員から「本番、予行の時みたいに、入口らへんから見とくのもありやで。」と伝えると驚いた表情を見せた。正解は一つではないことを伝えたかったが、本児の中では、中に入らなかった予行は、本番に向かっての助走だったのかもしれないと感じる。まさに、スモールステップであること、そしてその必要性を痛感した。

(3) 卒業式2日前・前日の様子

卒業式の練習時間になると、本児が「はよ、やるで。」と教員を呼び、落ち着いた様子だった。自分で花の色や種類を選び、教員と一緒に作った胸花を当日着けることは、本児の中で決まっていることを感じることもできた。予行練習を経験し、いよいよ気持ちが本番に向かっていた。荷物の整理では、気持ちを込めて整理整頓していた。iPadのBGMに合わせて歌を歌いながら、リラックスした様子で取り組んでいた。教員と、空間と時間を共有して荷物の整理をすることは、卒業及び退院に向けて、本児の気持ちを整えていくために、とても大事で必要なことであったと感じる。

書写の時間に、今まではなぞり書きをしていた本児が、初めて自分で「ありがとう」と書いた。様々な場面でずいぶん積極的になってきていた本児であるが、「自分で字を書く」ことは、とてもハードルが高いことであったと想像する。教員への信頼と感謝の気持ちが、「書く」という表現を可能にしたのではないかと感じた。卒業式前日に、『卒業生を送る会』

I 実践報告

として児童生徒と遊んだ後、教員作成のお祝いメッセージ動画を視聴した。すごく熱心に嬉しそうに観ていた。動画を観ていた教員が泣くと、「泣くなよ～」と困ったように言っていた。

(4) 卒業式 “本番編”

病棟まで教員が迎えに行くと、卒業式の衣装に着替えることも拒み、落ち着かない様子で廊下や自室を行き来し、顔を紅潮させお茶をがぶ飲みしていた。病棟スタッフが着替えを促すのを嫌がり怒っていた。そこで、着替えることは困難であると判断し、普段着のまま移動することとした。衣装は病棟スタッフが持って待合室へ移動した。再度、着替えを促すが、初めての衣装であることや着心地などに抵抗を示していた。教員から様々な提案をする中から、胸花を着けたジャケットを今着ている Tシャツの上に羽織ることに本児が同意した。急かさず、iPad を観ながら移動しても良いことを伝えた。この間、体育館で待機している現場の教員と、無線でやり取りし、状況を細やかに共有した。

本児は、椅子に座って iPad で動画を観続け、立ち上がろうとしなかったが、しばらくすると iPad を観ながら移動し始め、体育館の入り口に近づくと足が止まった。そこで、保護者（母親）と弟に踊り場に来てもらい、「がんばって。中にいて待っているからね。見ているからね。」と声をかけてもらった。本児は、二人の顔を見るなり顔を紅潮させ、とろけるような笑顔になり、頷いた。教員からも、いつも iPad を手にしていたので、お気に入りの教員のダンス動画を観ながら入ることを提案した。自分で iPad を持って教員の後ろを歩くのか横を歩くのか、教員が持ってそれを観ながら歩くのか、思いつく限りの提案をし、本児が選んで決めることができるようにした。本児は、びっくりしたのか顔を上げ、表情も少し緩み、「いいん？」と言った。

入る直前まで、「一緒やから大丈夫！」と声掛けし、iPad を恥じることなく堂々と教員が持つことで、本児が自信を持って胸を張って入場できるように心がけた。教員がダンス動画を映した iPad を肩に乗せ、本児はその後ろに待機し、入場準備が整う。教員が、動画が流れている iPad を後ろ向きに持って前を歩き、本児はそれを観ながら教員の後ろを歩いて体育館に入場した。入場中も、時々本児に目配せと声掛けをし、教員が普段に近い対応をすることで、安心できるように心掛けた。結果、本児は、不安と緊張で、下を向いて動画は観ておらず、教員の後ろにピタッとくっついて歩いていた。

本児は自席へ着席した。教員の座席は、本児の視界に入る位置にしておき、いつでもアイコンタクトが取れ、安心できるように配慮し、教員は本児のアイコンタクトを見逃さないよう注意深く見守り、頷き返すことを繰り返した。式が始まると、本児は教員に要所要所でアイコンタクトを取りながら、慎重かつ正確に、練習通りに動くことができていた。そして、答辞を読もうとマイクに近づき原稿を掲げた次の瞬間、「無理だ」と言わんばかりに一步下がり助けを求めると教員を見てきた。教員が駆けつけると、「先生読んで」と言ってきたので、教員が横で読み始めた。本児は原稿を目で追っていた。すると、終盤、教員へのお礼の部分から小さい声で読み始め、教員席の方を向いて、「ありがとうございます。ありがとうございました。」と礼とともに伝えることができた。

体育館から退場すると、表情が緩み、安心した様子になった。式に参加してくれたたくさんの方に、お祝いの言葉や褒める言葉をかけられ、笑顔でとても嬉しそうにしていた。最後の記念撮影では、写真を撮られるなど注目されることは避ける児童であったが、スムーズに撮影に参加することができていた。式後の保護者懇談では、自分が作った工作の作品などを保護者や弟に見せたり、弟にプレゼントしたりし、教員と保護者が話している間は、弟と二人で、嬉しそうに遊んでいた。

I 実践報告

(5) 考察

今回、卒業式という、大きな節目であり、本児にとってハードルが高い行事に参加することができた。卒業式練習に至るまでの様々な活動における指導を通して、教員との「信頼関係」を築けたことが大きな理由であると考ええる。ここで言う「信頼関係」とは、具体的に、自分の話を聞いて受け止めてもらえる、寄り添って一緒に考えてもらえる、自分のことを思って一生懸命してもらっている、同じ目線で関わってもらっているということを経験が感じ、心を開いて思いを伝え合うことができる状態であると考ええる。

5 まとめ

今回、児童と教員の信頼関係の上に安心が生まれ、やってみよう、チャレンジしてみようという気持ちが芽生えた。そして、児童の心の奥底にあるニーズを、課題として設定することができた。もちろん、このニーズは、信頼関係がないと引き出すことはできなかったであろう。教員は、児童のニーズに応えるべく、特性を踏まえた指導計画や指導内容を工夫した。

算数の授業では、「みんなと同じように教科書を使いたい。」という児童のこぼれ出た思いをキャッチしたことから、算数の指導方法について見直し、軌道修正することができた。新しい教材を手にした時の本児の表情の輝きは忘れられない。これを機に、本児は意欲的に生き生きと授業に取り組むようになり、発言も増えていった。算数の授業以外にも、自分の気持ちを伝えてくるが増えた。

家庭科の授業での出来事は、本児が、教員は自分の気持ちを受け止めてくれると信じているからこそ、教員が思い出すことを待つという行為に至ったと考える。

そして、一人だけの分教室の卒業式に参加するということを受け入れ、練習に意欲的に取り組むことができた。もちろん、見通しを持たせて不安を軽減する、スモールステップで取り組むなど、基本的な配慮は欠かせなかった。練習の過程で、想定外の場面においては抵抗を示すことがあり、その都度、本児とコミュニケーションをとり、取り組みを修正していくということを繰り返しながら進めていった。

予行練習での出来事は、改めて、いかに本児にとって卒業式に参加するということが大きな出来事であるのかを痛感させられた。練習の過程で、本児が大きく成長したことを目の当たりにし、このままスムーズに参加できるのではないかという気持ちが、教員にあったことは否めない。しかし、その姿を本児の実態であると受け止め、考え得る参加の仕方のバリエーションを想定し、対応できるようにした上で、教員一丸となって、卒業式当日を迎えた。

当日、本児は、教員が想像していた以上に、式場内に入って参加するという気持ちをもって、最後に後押ししたのは、式を見に来てくれた母親であったと思う。母親と対面した時の紅潮した本児の顔は忘れられない。そして、その表情を見ることができた教員もうれしく、そして心が温かくなった。

一人だけの卒業式であったが、本児は決して一人きりではなく、本児を見守ってきた教員や病棟スタッフ、当日駆け付けた保護者と共にあった卒業式であったと言えるのではないだろうか。